

がん患者およびその家族と医療者を 対象とした災害時のケアパッケージの検討

— Webによる調査をもとに —

沼田 靖子¹⁾ 牧野 佐知子²⁾ 坂下 玲子³⁾ 荒尾 晴恵⁴⁾
川崎 優子⁴⁾ 成松 恵⁴⁾ 小林 珠実⁵⁾ 内布 敦子⁴⁾

要 旨

本研究の目的は、2004年に本研究プロジェクトが作成した災害時版患者用パンフレットを検討することである。調査は、Web上での研究協力の呼びかけに賛同した33名を対象として、筆者らが作成したパンフレットを洗練するための構成的質問と自由記載によるデータ収集をWeb上で行った。データ分析は、構成的質問については記述統計を、自由記載内容についてはカテゴリー化を行い、分析した。その結果、絵や文字の大きさの適切さについては、19人（58%）が「適切である」と回答し、13人（39%）が「まあまあ適切である」と回答していた。表現の適切さについては、「適切である」という回答が18人（55%）、「まあまあ適切である」という回答が14人（42%）であった。また、実際の生活に対する有用性に関しては、19人（58%）の回答者が「実際に使えそうだと答えていた。絵や文字の大きさ、表現の適切さ、実際の生活に関する有用性については、いずれも32人（97%）が適切、まあまあ適切・実際に使えそうだと回答しているが、量の適切さについては、「適切である」という回答が19人（58%）、「多い」と回答した人が14人（42%）であった。また、パンフレットで役に立つ情報は、災害時に自己対処する方法・食事に関する情報・災害に備えたがん療養中の自己管理の方法・化学療法に関する知識・その他に分類された。

以上の結果から、パンフレットの量については改善の必要性が示唆されたが、その他の表面妥当性については概ね適切であった。パンフレット中の役立つ情報として、災害時に自己対処する方法や災害に備えたがん療養中の自己管理法が上位に挙げられたことは、「がん患者のセルフケア能力を高める」ことに本パンフレットが活用できることを示唆していた。

キーワード：災害、がん、ケアパッケージ、Web調査

-
- 1) 兵庫県立大学看護学部 実践基礎看護学講座 生活援助学
 - 2) 兵庫県立大学大学院 看護学研究科看護学専攻博士前期課程（修士課程）
 - 3) 兵庫県立大学看護学部 看護基礎講座 基礎看護学
 - 4) 兵庫県立大学看護学部 実践基礎看護学講座 治療看護学
 - 5) 大阪大学大学院 医学系研究科保健学専攻 看護実践開発科学講座

I. はじめに

現在、日本におけるがん治療の場は、入院期間の短縮に伴い、病棟から外来、在宅へと移行してきている。また、化学療法の安全性や副作用対策の進歩によって積極的に外来化学療法や強オピオイド鎮痛薬による痛みのコントロールが在宅で行われている。同時にさまざまな治療法の開発により、がんの長期生存者も増え、外来で通院治療を受けているがん患者や、在宅療養中のがん患者の数は、近年増加している。そしてこの現状は、がん患者自身で療養上の問題に向き合い、自分で判断し、自分で対処するための自己管理能力（セルフケア能力）ががん患者に求められていると言える。

本研究プロジェクトが行った災害時のがん看護ケアニーズ調査で、看護師は災害時のがん患者の状況や、がん患者の治療継続に関して、ほとんど記憶していなかったこと、災害時は救急患者の治療が優先されていたことが明らかになった。したがって、災害が起こると、がん患者は自らセルフケア能力を発揮し、療養や治療が継続されるように医療者にアクセスし、時としてがん患者自身が治療継続を担う状況が予測される。

以上のことから、昨今の国内外における災害の多発を鑑み、本研究プロジェクトでは、災害に備えて、がん患者やその家族のセルフケア能力を平

常時より高めるためのケアパッケージを開発することの必要性があると考えた。そこでまず、平成16年度は阪神淡路大震災を経験した看護師にインタビュー調査を実施し、その結果明らかになった災害時のがん看護ケアニーズをふまえ、災害時版患者用ケアパッケージを作成した。このケアパッケージとは、既存の平常時版患者用パンフレットとともに、日本語版では9つのパンフレットで構成されているもの（表1参照）を意味する。また、本学看護学研究科21世紀COEのホームページで英語版災害時用の4つのパンフレットと共に公開している。

本研究は、平成16年度に本研究班が開発しWeb上で公開している「がん患者用ケアパッケージ」の評価を行うことを目的に、Webアンケート調査を行い、各パンフレットの活用の実態を明らかにすることを目的とした。

II. 研究方法

1. 研究協力者

インターネットを介して、ホームページにアクセスしてきた人を対象とした。Web上で研究協力を呼びかけ、研究内容に賛同した方を研究協力者とした。

表1 本研究班がWeb上で掲載しているパンフレットの種類

<ul style="list-style-type: none"> ・災害に備えて—がんの化学療法を受けている人のために ・災害に備えて—化学療法中の食事の工夫 ・災害に備えて—化学療法中の副作用への対処 (感染・出血・貧血への対処) ・災害に備えて自分のからだをよく知って痛みを緩和する ・平常時版—化学療法に取り組むには ・平常時版—食べられないときの食事の工夫 (化学療法の前・中・後) ・平常時版—代替・補完療法とどうつきあうか ・平常時版—化学療法の副作用について (感染・出血・貧血への対処) ・平常時版—緩和ケア

2. データ収集方法

1) パンフレットの評価方法

最初に、協力者の特性（協力者を患者・家族・医療関係者なのかを明確にすることによって、感想や意見の動向が明確となる）、パンフレットの種類、意見・感想などで構成したWeb調査表を作成した。具体的質問内容と質問方法については、次のとおりである。なお、（ ）内に回答方法と選択肢を示す。

<調査項目>

- (a) 属性（選択肢から選択：患者・家族・医療者・その他）
- (b) 性別（選択肢から選択：男性・女性）
- (c) 年齢（選択肢から選択10代、20代、30代、40代、50代、60代、70代、80代、その他）
- (d) どのパンフレットをお読みにになりましたか？（自由記載）
- (e) お読みにになったパンフレットについて、絵や文字の大きさは適切でしたか？（三者択一回答：適切—まあまあ適切—あまり適切でない—適切でない）
- (f) パンフレットに書かれている内容の量は適切でしたか？（三者択一回答：多い—適当—少ない）
- (g) パンフレットに書かれた表現は適切でしたか？（四者択一回答：適切—まあまあ適切—あまり適切でない—適切でない）
- (h) あなたの生活に実際に使えそうですか？（四者択一回答：使えそう—まあまあ使えそう—あまり使えない—使えない）
- (i) パンフレットの中で特に役立つ情報はどんな内容でしたか？（自由記載）
- (j) 現在、あなた自身が病気や治療と関連して災害に備えていることはありますか？→「ある」とお答えいただいた方は、病気や治療と関連して災害に備えていることはどんなことですか？具体的にお答えください。（二者択一回答。あるのみ自由記載）
- (k) その他のご感想、「こんな情報も載せて欲

しい]、「この部分の内容はわかりにくかった」などのご意見、ご要望。（自由記載）

2) Web調査

先行研究から、パンフレットの評価は、パンフレットでの指導後に直接感想を聞き修正し評価¹⁾する方法、また評価質問用紙を使用して評価する方法²⁾が用いられてきた。本研究では、パンフレット自体がWebで公開されており、対象者が読んだ直後にその場で意見を記載できなかつ記載が容易であること、対象者が特定できないこと、調査の作業が郵送調査よりも少ないことから、Web上で質問を行い、パンフレットを評価することとした。

3. データ収集期間

平成17年7月～平成18年3月

4. データ分析

回答を選択するデータは記述集計を、また自由記載に関しては、カテゴリー化を行った。

5. 倫理的配慮

Web調査のため下記の項目については、Web上に記載し、賛同した方を研究協力者とした。

- 1) 研究の参加については、協力者の自由意志であり、強制力は働かないこと
- 2) 研究目的や方法、利益や不利益について
- 3) 研究で得られたデータの取り扱いについて（プライバシーの保護、研究終了後のデータの破棄など）
- 4) 研究成果の公表について

Ⅲ. 研究結果

1. 協力者の概要

約8ヶ月半のデータ収集期間中に得られた回答数は33であった。33の回答の中で、31人（94%）が医療者であった。家族であり医療者である方が

表2 協力者の概要

n=33		
属性	患者	0人(0%)
	家族	1人(3%)
	家族/医療者	1人(3%)
	医療者	31人(94%)
性別	男性	4人(12%)
	女性	29人(88%)
年齢	10代	1人(3%)
	20代	3人(9%)
	30代	16人(49%)
	40代	11人(33%)
	50代	2人(6%)

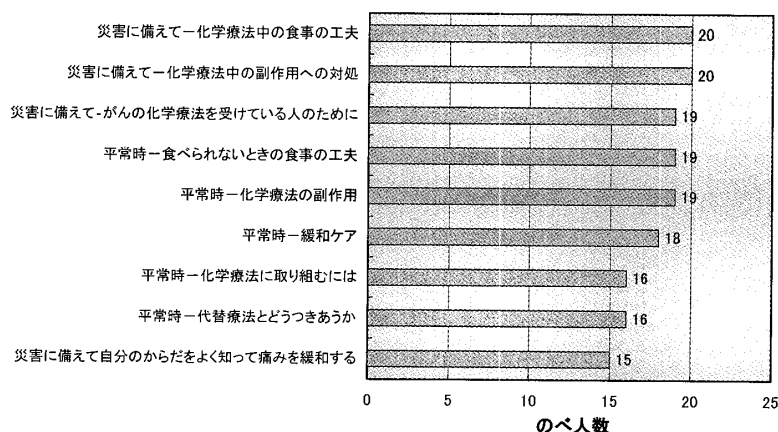


図1. どのパンフレットをお読みになりましたか(複数回答可)

1人(3%)、家族が1人(3%)で、患者からの回答の送信はなかった。協力者の概要は表2のとおりである。

2. パンフレットに対する評価

1) 選択回答

最もよく読まれたパンフレットは、「災害に備えて-化学療法中の食事の工夫」と「災害に備えて-化学療法中の副作用への対処」がどちらも20人であった。次に、「災害に備えて-がんの化学療法を受けている人のために」「平常時版-食べられないときの食事の工夫(化学療法の前・中・後)」「平常時版-化学療法の副作用について(感染・出血・貧血への対処)」が19人であった(図1参照)。災害時版、平常時版ともに、化学療法中の食事と副作用に関するパンフレットが9つのパンフレットの中で最もよく読まれていた。

最初に絵や文字の大きさの適切さについては、19人(58%)が「適切である」と回答し、13人(39%)が「まあまあ適切である」と回答していた。表現の適切さについては、「適切である」という回答が18人(55%)、「まあまあ適切である」という回答が14人(42%)であった。実際の生活に対する有用性に関しては、19人(58%)の回答者が「実際に使えるようだ」と答え、13人(39%)が「まあまあ使えるようだ」と回答している。さら

に、絵や文字の大きさ、表現の適切さ、実際の生活に関する有用性については、いずれも32人(97%)が適切、まあまあ適切であり、実際に使えるようだ」と回答している(図2, 3, 4参照)。しかし、内容の量の適当さについては、「適当である」という回答が、19人(58%)で、「多い」と回答した人が14人(42%)であった(図5参照)。

次に、パンフレットの中で役立つ情報については、災害時に医療機関や医療者へアクセスする方法やサポートの受け方、症状出現時の対処方法、災害時の感染予防に関する情報など、「災害時に自己対処する方法」(8人)と、化学療法中の食事の工夫や災害時の食事の情報など「食事に関する情報」(8人)が最も多く、次いで「災害に備えたがん療養中の自己管理の方法」(5人)、「化学療法に関する知識」(5人)であった(表3参照)。

2) 自由記載

パンフレットに対する意見の自由回答の分析を以下に述べる。なお、【 】はカテゴリー名を示す。

パンフレットに対する意見として、【具体的】、【アクセスできるサイトが多い】、【役立つ情報】、【根拠ある情報】、【詳細な説明】、【災害へのそなえのきっかけ】など、肯定的な意見が述べられていた。同時に、【個人に合わせた修正】、【写真の

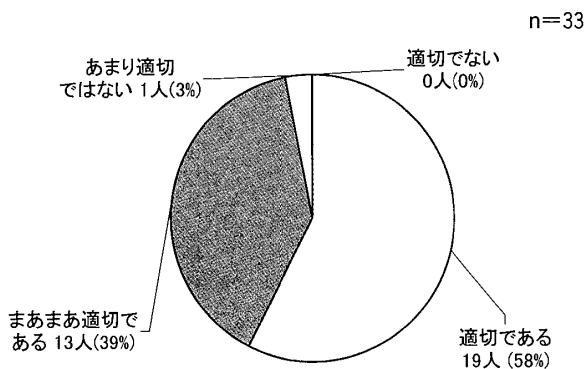


図2 絵や文字の大きさは適切でしたか

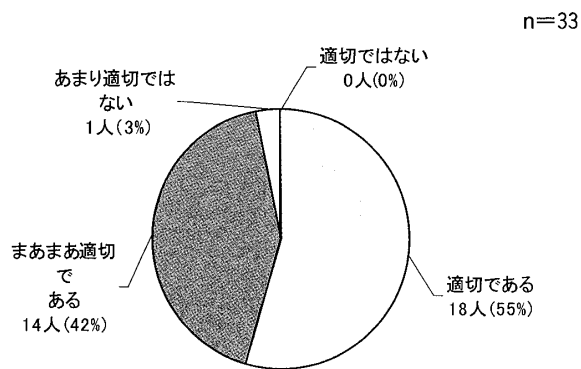


図3 表現は適切でしたか

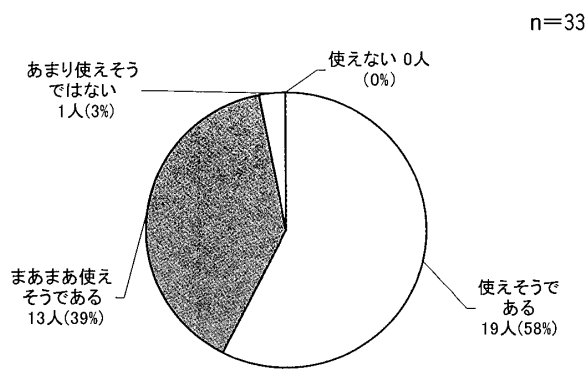


図4 生活に実際に使えそうですか

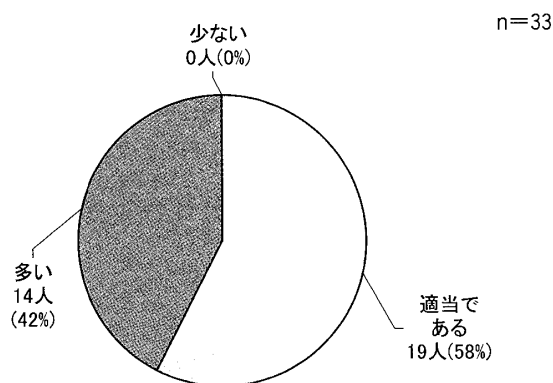


図5 内容の量は適当でしたか

表3 パンフレットの中で役に立つ情報

項目	内容
災害時に自己対処する方法について	災害時に医療機関や避難所で医療者へアクセスすること
	災害時のサポートの受け方
	災害時の感染予防に関する知識
	災害時の痛みの対処方法
	災害時に症状が出現した際の対処の方法
食事に関する情報	化学療法中の食事の工夫
	災害時の食事の情報
	カラー掲載された食事メニューや食品が患者指導の際にイメージしやすい
災害に備えたがん療養中の自己管理の方法	自分の状態をモニターし記録する方法 (骨髄抑制中の自己チェック表)
	自己記入シートに自分の状態を記録しておくこと
	薬剤やパウチなどがん療養に関連した情報を記録しておくこと
化学療法に関する知識	抗がん剤に関する知識
	抗がん剤の副作用に関する知識
	化学療法について
その他	緩和ケアについての情報、災害時の具体的イメージができる情報、代替療法を始める際の注意点と効果の確認方法、性生活に関する内容、災害時の状態の想定と備えについて、災害時版と平常時版が分かれていることなど

応用】、【災害時に向けたICカード】、【お薬手帳の応用】などの工夫が提案された。さらに、【入院期間中読破できるようにしてほしい】、【便秘に関するさらなる詳細】、【施設間のネットワークの構築】、【災害時の薬剤調達の方法】、【災害時に備えた薬剤の備蓄量の情報】、【「病気を抱えている被災者」に対する環境（易感染者）や食事】、【受診の斡旋の対応】など、災害に向けた要望も明らかになった。

IV. 考察

本研究は、Web上でのアンケート調査を行い、パンフレットの評価を試みた。表面妥当性、対象者の関心、役立つとされた情報について考察する。

1. 表面妥当性

患者用ケアパッケージに関するWebアンケート調査に回答した33人のうち、内容の量について、14人（42%）が「多い」と回答しており、改善の必要性が示唆された。先行研究²⁾では、特にページ数の評価はされていなかったため、どのくらいの量が良いという規定はないようである。本研究での各パンフレットのページ数は8-20ページであり、災害時に備えて見る時に多いと感じたのではないかと予測できる。

また、絵や文字の大きさ、表現の適切さ、実際の生活に関する有用性については、いずれも32人（97%）が適切、まあまあ適切である、実際に使えそうだと回答しており、内容の量以外の表面妥当性は概ね適切であるといえる。

2. 対象者の関心について

最も読まれたパンフレットの種類が、災害時版・平常時版を合わせて、化学療法中の食事と副作用についてであった。また、役立つ情報として寄せられた意見や自由記載の傾向からも、「化学療法の副作用」と「食事」に対する関心の強さが示唆された。「副作用」と「食事」の関心が高い

理由は、他のパンフレットと比べると記載内容が多いことから目に触れる機会が多かったことが予測できる。以下にそれぞれの理由について考察する。

最初の「化学療法の副作用」は、『Iはじめに』でも前述したように、治療の場が入院から外来・在宅に移行していることが背景にあると思われる。すなわち、外来化学療法へ移行後、患者自身がいままでの日常生活と治療をどのように折り合いをつけていくかなど調整能力が必要とされる³⁾ことになる。本研究の対象者のほとんどが医療従事者である。看護師は、どこに勤務していたとしても、病院から在宅、在宅から病院へ移行する際の生活指導を行う可能性が高い。このようなことも「化学療法の副作用」への関心が高い理由と推測できる。

2つめの「食事」の関心が強い背景には、第一に平成17年に制定された「食育基本法」に代表されるように、現代社会における「食」への関心が高いことが推測できる。第二に、対象者のほとんどが医療従事者であることから、普段から化学療法により食欲が低下した患者に関わる機会が多く、カンファレンスでの検討やNSTチームへの相談が行われていることが推測できる。災害時においても、食事を食べることは、「生きること」そのものであり、化学療法中で食欲がない時でも、どうかして少しでも食べてほしいという医療者の願いが表れているものと思われる。

3. パンフレットで役立つ情報について

さらに役立つ情報として、災害時に自己対処方法や災害に備えたがん療養中の自己管理法が上位に挙げられていた。したがって、パンフレット内にある災害時の自己対処方法ががん患者のセルフケア能力を高めることに貢献できるのではないかと考える。

最後に、今後の課題として、今回の対象者の殆どが医療従事者であったため、がん患者の声も反映させながら、繰り返し評価を行い、パンフレッ

トを改善していきたい。加えて、このパンフレットを紹介したり使用したりする看護職に、がん患者のセルフケア能力を理解する視点がなければ、患者の状況に合わせた活用が期待できない。よって、患者用のケアパッケージの使用方法を普及させることや、看護職用ケアパッケージの開発についても検討していきたいと考える。

V. 結 論

本研究の目的は、Web上の調査をもとにして、本研究プロジェクトが開発しWeb上で公開している「がん患者用ケアパッケージ」のパンフレットを検討することであった。研究の結果、以下のことが明らかになった。

- (1) 患者用パンフレットの内容の量については、改善の必要性が示唆された。
- (2) 絵や文字の大きさ、表現の適切さ、実際の生活に関する有用性などの表面妥当性については概ね適切であることが明らかとなった。
- (3) 役立つ情報や自由記載から、化学療法の副作用と食事に対する関心の強さが示唆された。

- (4) 役立つ情報として、災害時に自己対処する方法や災害に備えたがん療養中の自己管理法が上位に挙げられていたことは、本パンフレットががん患者のセルフケア能力を高めるために活用できると考えられる。

VI. 本研究の限界

本研究はWeb上の調査であり、ホームページにアクセスする人に偏りがみられた。また、インターネットを利用した調査を今までの調査方法の代替手段として利用することができないという意見⁵⁾もあることから、調査方法についてはさらなる検討が必要と思われる。

VII. 謝 辞

2005年度の調査を行うにあたり、ご協力いただきました各施設の災害担当者の皆様に心より感謝を申し上げます。

なお本研究は、21世紀COEプログラム「ユビキタス社会における災害看護拠点の形成」の助成金を受け、行いました。

引 用 文 献

- 1) 小島涼子他. 人工股関節置換術患者への早期自立に向けた生活指導パンフレットの作成と評価. 月刊ナーシング. 26(6), 2006, 85.
- 2) 今野美紀他. 入院時の保護者の喫煙状況と受動喫煙防止のためのパンフレットに対する評価. 札幌医科大学保健医療部紀要, 8, 2005, 52.
- 3) 前原みゆき. がん化学療法中の患者の生活支援. がん看護. 11(2), 2006, 143-147.
- 4) 厚生労働省ホームページ, <<http://www.mhlw.go.jp/shingi/2007/10/dl/s1005-6c.pdf>>
- 5) ハツ橋武明. 簡便だがリスク同伴のインターネット調査. 文教大学大学院情報研究科IT News Letter. 2(2), 2006, 11-12.

参 考 文 献

- 1) 山本あい子・岸田佐智. 日本災害看護学会誌の5年間の総括と今後の展望. 日本災害看護学会. 5(3), 2002, 23-28.
- 2) 森下安子他. A県における災害看護への取り組みに関する検討. 日本災害看護学会. 4(3), 2002, 22-32.
- 3) 森脇寛他. 集団災害に対する病院に対応について. 日本集団災害医学会誌. 8(3), 2004, 229-237.
- 4) 山下哲郎. 震災を想定した住民の受療行動に関する考察. 病院管理. 37(1), 2000, 15-23.
- 5) 目黒信子他. 災害発生を想定した看護部門緊急連絡網の検証. 日本看護学会論文集(看護管理). 32, 2001, 351-353.
- 6) 浅野泰. 阪神大震災, 1年をふりかえって 災害時の透析医療について. 透析ケア. 2(2), 1996, 13-17.
- 7) 矢田志津子他. 血液透析患者への緊急離脱避難訓練実施の有効性. 日本看護学会論文集(看護総合). 33, 2002, 135-137.
- 8) 小田育子他. 在宅CAPD患者の緊急・災害時の安全対策. 日本看護学会論文集(地域看護). 32, 2001, 91-93.
- 9) 厚生省健康施策局指導課. III災害に備えた事前の体制整備, 21世紀の災害医療体制: 災害にそなえる医療のあり方. 厚生省健康施策局指導課監修. 第1版第1刷. 東京, へるす出版, 1996, 25-103.
- 10) 石原哲. 第1章災害に強い病院づくり・第2章災害発生時の防災対策. 病院防災ガイドブック: 災害発生時における病院防災対策のあり方. 石原哲編. 第1版第1刷. 東京, 真興交易(株)医書出版部, 2001, 15-64.
- 11) 磯村毅他. 東海豪雨が在宅酸素療法患者に与えた影響. 呼吸. 21(1), 2002, 86-91.
- 12) 川崎恵実他. 医療ニーズの高い在宅療養者が東海豪雨に遭遇したときの体験. 月刊ナーシング. 22(8), 2002, 128-135.
- 13) 松岡哲也他. II 阪神・淡路大震災時の傷病構造・III 集団災害時の患者対応. 集団災害医療マニュアル: 阪神・淡路大震災に学ぶ新しい集団災害への対応. 吉岡敏治編. 第1版第1刷. 東京, へるす出版, 2000, 36-50. 102-111.
- 14) 匿名他. 《体験手記34編》そのとき私は…。オストメイトはその時…: 大震災・その証言と教訓. (社)日本オストミー協会兵庫県センター記念誌編集委員会. 神戸, (社)日本オストミー協会兵庫県センター, 平成8年, 26-54.

Evaluation of the Care Package for Cancer Patients during Disaster situations

— A web-based survey of patients with cancer,
their families and healthcare professionals —

NUMATA Yasuko¹⁾, MAKINO Sachiko²⁾, SAKASHITA Reiko³⁾
ARAO Harue⁴⁾, KAWASAKI Yuko⁴⁾, NARIMATSU Megumi⁴⁾
KOBAYASHI Tamami⁵⁾, UCHINUNO Atsuko⁴⁾

Abstract

The study aimed to evaluate the Care Package for Cancer Patients during Disaster situations, developed in 2004 by the Cancer Nursing Group. Studied were 33 people who agreed to a request seeking cooperation with the study online. The study involved questionnaires consisting of structured and open-ended questions online, designed by researchers to get feedback from participants in order to consider the care package. Participants' responses to structured questions were analyzed using descriptive statistics from closed-ended questions; comments on evaluation of the care package were categorized. As a result, regarding appropriateness of character and illustration size, 19 (58%) answered "appropriate" and 13 (39%) answered "reasonably appropriate." Regarding terminological and idiomatic appropriateness, 18 (55%) answered "appropriate" and 14 (42%) answered "reasonably appropriate." Regarding usefulness in actual life, 19 (58%) responded "seems useful" and 13 (39%) responded "seems relatively useful." As noted above, 32 (97%) responded positively ("appropriate," "reasonably appropriate," "seems useful," "seems relatively useful") to the three questions regarding appropriateness of the illustration/character size, terminology, and usefulness in actual life. Regarding appropriateness of the volume of information provided, 19 (58%) answered "appropriate," but 14 (42%) answered "too large." Useful information in the pamphlets was classified into the following categories: information on coping with specific situations themselves during disasters; information on eating during cancer treatment; information on self-management in cancer treatment during disaster preparation; knowledge regarding chemotherapy; and others.

Although the survey results indicated the necessity for improvement in terms condensation of volume, they also indicated that the care package was rated "appropriate" overall. The fact that

1) Fundamental Nursing, Basic Clinical Nursing, College of Nursing Art and Science, University of Hyogo

2) Graduate School of Nursing Art and Science, University of Hyogo

3) Nursing, Nursing Foundation, College of Nursing Art and Science, University of Hyogo

4) Clinical Nursing, Basic Clinical Nursing, College of Nursing Art and Science, University of Hyogo

5) Division of Health Science, University of Osaka

‘information on coping with specific situations themselves during disasters’ and ‘information on self-management in cancer treatment during disaster preparation’ ranked high as useful information suggests the pamphlets can be used to help cancer patients improve their self-care skills and abilities, as originally intended by the Cancer Nursing Group.

Key words : Disaster ; Cancer ; Care package ; web-based survey